

研究課題

「近現代社会の基本的価値に関する社会科教材開発
ー人文社会専門諸科学の成果とその横断的連携の視点からー」

研究機関 平成 22 年度～平成 23 年度

研究代表者 人文社会教育学系・准教授・小島伸之
研究組織 人文社会教育学系・教授・松田慎也
人文社会教育学系・准教授・畔上直樹
人文社会教育学系・講師・吉田昌幸
教科領域教育専攻社会系コース・修士課程・米山武志
教科領域教育専攻社会系コース・修士課程・井上未来

1. 研究プロジェクトの目的・前提・方法

本研究プロジェクトは、憲法学、歴史学、宗教学、経済学などの人文社会諸科学の成果を横断的・立体的に連携させ、「社会的事象に関心を持って多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させる」という、平成20年3月の学習指導要領社会科改訂の基本方針を踏まえた、社会科教員養成のための社会科教材を着想・作成する論理的・多角的視点と学術的方法論を身につけるための教材—《教材を開発するためのメタ教材》—を作成すること、およびそれに基づいた試験的講義を展開することを目的としている。

上越教育大学、鳴門教育大学、兵庫教育大学の三大学による文部科学省先導的大学改革推進委託授業（平成22-23年度）「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域に関する調査研究」が、教科の専門性の重要性を前提にした「教科内容学」の重要性を指摘しているように、教科の教育においては、「どのように教えるか」が重要であるだけでなく、「何を教えるか」、すなわち、“教える内容についての学術的アプローチ”が重要となる。

初等中等教育における社会科関連科目は、人文科学、社会科学、自然科学にまたがる広範な学術領域に関わるものであるが、特に、人文・社会科学に関しては、主として自然科学に関する教科（例えば、算数・数学、理科等）比して相対的に“正解”を固定化しにくいという特徴を有している。それは、人文・社会科学という学術領域が、価値観やイデオロギーの問題と関わらざるを得ないことに関連している。しかし、初等中等教育において価値観やイデオロギーの問題に対して全面的に踏み込むことには困難が伴うことも事実であり、この点は、社会科関連科目が“暗記科目”と一般的に評価されてしまうこととも関連していると思われる。

しかし、文部科学省が平成20年3月に行った小学校・中学校の学習指導要領改訂は、その基本方針として、「社会的事象に関心を持って多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させる」とした。

「社会的な見方や考え方」や、社会的事象を「より広い視野」から「多面的・多角的に考察」という行為は、社会やそれを構成する人間について、一元的でない多様な価値観とその相互対立が存在すること、そしてそれらには容易に正否・優劣をつけることができない場合が存在することを理解する必要がある。小学生、中学生にそれらが求められる以上、社会科を教える教員となる者は、社会やそれを構成する人間について、一元的でない多様な価値観とその相互対立について、専門的学術領域の研究成果を前提とした基本的知識を十分に身に着ける必要がある。

また、地理的要因と歴史的事象は相互に関連性があること、またそれらを前提にして現在の公民的認識・制度が成立していることを踏まえるならば、各専門的学術領域間の連携を意図することは必然的に必要な要素となる。

以上のような問題意識に基づいて、本プロジェクトは、近現代社会の基本的諸価値について、その背後にある対立構造を抽出し、それらの対立の優劣について仮説的に正否・優劣を断ずるのではなく、具体的事例と関連させながら是是非非に提示することを試みたものである。

2. 本プロジェクトの展開

本プロジェクトは、上越教育大学の社会系に関連する教員・院生による研究会と、個別作業によって展開された。

平成21年度の前期においては、集中的に研究会を行い、まず、上記1. で記した内容について合意形成をした。その上で、平和、人権、民主主義、平等、自由、市場、環境等を代表とする現代社会の基本的諸価値の中から、各研究メンバーが担当する個別テーマについて調整・決定を行った。具体的には、①人権に関する価値対立—自由と平等—、②市場に関する価値対立—古典派とケインジアン—、③集団的意思決定（政治）に関する価値対立—民意尊重とリーダーシップ—、④文化・宗教に関する価値対立—アイデンティティと摩擦—、⑤環境・開発に関する価値対立—自然と作為—、⑥戦争・平和に関する価値対立—自立と隷属—、の6テーマについて取り上げることとなった。

平成21年度の後期以降、個別に設定したテーマについて、社会科教員養成のための教材化のための資料収集、整理及び教材化作業を進めた。それらの作業を各自進行する過程で、社会科教員養成のための社会科教材を着想・作成する論理的・多角的視点と学術的方法論を身につけるための教材—《教材を開発するためのメタ教材》—の具体的作成には、実際の講義において試験的に本プロジェクトの視点を反映させた講義を行い、その成果と反省を踏まえてから行うべきであるという意見において一致をみたため、各自が担当する講義において個別研究の成果を反映させることを試みた。

研究プロジェクトセミナーは、受講希望者がいなかったため開講されなかったが、2011年度及び2012年度のブリッジ社会、日本国憲法、政治学概説、経済学概説、宗教学概説、現代社会論、日本史研究A・B、現代社会認識論等の授業の一部において本プロジェクトの成果に基づいた授業を展開した。さらに、ブリッジ社会に関しては、授業担当以外の研究メンバーが各講義に立ち会い、その後の研究会を行って反省点・改善点を議論した。

3. 個別テーマ毎の基本的価値対立

各個別テーマにおける価値対立の概要は以下のとおりである。

①人権に関する価値対立—自由と平等—

基本的人権は現代社会において、侵すことのできない重要な価値であるとされている。しかし、憲法学における人権論においては、自由権と社会権は相互に異なる性格を持つ

のみならず、本質的には矛盾する権利であるとも解されている。すなわち、自由権は近代初期における「自立した個人」「権力への不信」を前提とした権利であり、社会権は産業化の進展後における貧富の差の拡大をふまえた「寄る辺なき個人」「権力による直接救済の必要性」を前提とした権利であるためである。

自由の過度に抑圧は人間の主体性の否定となるが、過度な自由は無秩序を招来する。

過度な不平等は弱肉強食の殺伐した社会を生むが、過度な平等は活力の否定となる。

また、そもそも不平等な社会において平等を達成しようとする場合、社会への権力的介入が不可避となり、必然的に自由の制限を伴わざるを得ない。

②市場に関する価値対立—古典派とケインジアン—

グローバル化が進捗する現代社会において、市場における自由競争の重要性が強調されている。財政金融政策の無効性の主張は「ケインズは死んだ」という言葉に象徴的に表れている。一方、近年の我が国における「規制緩和」「官から民へ」というスローガンのもとに行われた経済政策の結果、新規参入に伴う過剰供給によるタクシー業界の混乱（2002年以降）、構造計算書偽造問題（姉齒事件、2005年）、陸援隊高速バス事故（2012年）などの問題が生じるとともに、地方経済の疲弊や「失われた20年」（1990年～）という深刻なデフレ不況を招来している。

世界的にみても、アジア通貨危機（1997年）、リーマンショック（2008年）など、世界経済に深刻な影響を与える事態が続いている状況にある。

ここには、上記①のテーマと同様の価値対立が存在し、自由競争がなければ市場による革新や健全な自然淘汰、「努力した者が報われる社会」の達成が不可となる一方、規制がなければ不祥事が生じるのみならず、市場そのものの維持が困難となる。

③集団的意思決定（政治）に関する価値対立—民意尊重とリーダーシップ—

民主主義は現代社会において基本的な価値とされている。現代の日本において「民主主義」は、政治領域において重視されるのみならず、例えば司法の領域においても「裁判員制度」が導入（2009年～）されるなど、その価値の尊重は多くの領域で強調されている。しかし、アリストテレス『政治学』にみられるように、政治学はその揺籃の時から「民主主義」の危険性を説いてきた。日本国憲法が、直接民主制的制度を一部採用しながらも、原則として間接民主制を政治の基礎理念としていることも、民主主義に対する平板な信頼を否定することを前提としたものである。

ヒトラーなどの独裁者が、民衆による支持を基礎として、すなわち民主主義を母体に生まれてきた事実は、重要な歴史的教訓である。現実の日本の政治状況を鑑みても、「衆愚政治」の問題をイメージすることは、そう困難ではないであろう。

また、会社法の規定する経営システムなど、現実の社会集団における意思決定において、メンバー全員の意思の集約よりも、専門的知見や経験に基づいたリーダーシップに基づく意思決定が重視されている状況は、社会的経験を想起すれば容易に発見できることでもある。

その所属メンバーの意向（民意）の尊重と、専門的リーダーシップに基づく判断との間に葛藤が生じた場合、どのような基準・根拠に基づいて、集団的意思決定を行うべき

なのかという問題は、国政などの教義の政治領域のみならず、身近な日常生活上の問題としても、重要な価値対立である。

④文化・宗教に関する価値対立—アイデンティティと摩擦—

アリストテレスが『政治学』において、「人間はポリス的存在である」と述べたように、個々の人間はある特定の共同体と無関係で存在することは現実には不可能である。そして、伊藤博文が枢密院における大日本帝国憲法草案の第一読会（明治21年6月18日）の冒頭において、国家の「機軸」の重要性を説いたことに象徴されるように、ある共同体は、その共同体意識（われわれ意識）を担保する何らかの共有概念が必要となる。伊藤がその時、ヨーロッパにおける「機軸」は「宗教」であると述べたように、世界的にみれば、宗教は共同体意識を担保する重要な機能を歴史的に果たしてきたといえる。一方、宗教や文化が担保する共同体意識は、他の共同体の共同体意識とは相容れない要素を有していることも少なくなく、深刻な宗教間、国家間、民族間等の対立の原因となっていることも事実である。

また、宗教的対立を止揚するとされた共産主義のイデオロギーにしても、特定の宗教を信じる立場からは、到底受け入れえないものとならざるを得ない。

アラブとイスラエルのパレスチナ問題、アイルランド問題、チベット問題、9.11同時多発テロなど、「機軸」間の相容れなさを背景とする具体的対立の事例は無数に存在し、また冷戦という大きなイデオロギー対立が終結した後、拡大する傾向にある。

社会的存在としての人間が共同体の「機軸」を必要不可欠とする一方、現実の社会においては、全人類共通の「機軸」が存在していない。民主主義や人権をその「機軸」とすべきであるという思考も存在する一方で、M.K.ユルゲンスマイヤーが『ナショナリズムの世俗性と宗教性』で指摘するように、ある立場からは普遍的とされる民主主義や人権などの基本的価値も、他の立場からは神秘性と特殊性を不可避免的に帯びた存在と見做され得る。

⑤環境・開発に関する価値対立—自然と作為—

人間は自然とともに生き、自然を愛する存在である一方、自然を制御・利用し生活上の利便性の向上を図ることは、人類の進化の歴史において常に継続されてきた営みである。自然災害の猛威への備えや、安定的な食料の確保は、移動通信手段の発展は人類共通の目標であり続けている。しかし、人間による自然の開発や新技術の創造は、歴史的に紛争や戦争の要因となってきただけでなく、現代においても、エネルギー問題、食糧問題、環境破壊問題、地球温暖化問題、原発問題等は世界的課題として存在し続けている。

「持続可能な開発」などの概念が提示され、その解決が企図されてはいるものの、先進諸国と発展途上諸国間の対立、国益の対立の点から、それが世界規模で決定的な共通理念となり得るかは不透明である。先進諸国が、そろって現在の生活の文明的レベルを下落させてまでも持続可能性を選択するということは現実には困難であろうし、発展途上諸国に持続可能性の尊重を強いれば、先発組が後発組の発展を阻害する口実という批判を受けることになりかねない。

また、さらにこの問題を困難にするのは、我々が維持すべき「自然」とはなんであるのか、という点が、一義的に明確とは言えない点である。例えば、日本人が「自然」の代表と感ずるであろう稲穂の並ぶ田園風景を例にしても、稲は外来種であるという事実突き当たる。里山や鎮守の森についても、継続的に植樹などの整備作為が継続されてきた結果、現在の姿となっている。現在の「自然」は、人類の継続的な作為の結果ともいえるのである。現代に生きる我々が感ずる「自然」の維持と、人間の「作為」による自然の変化という観点から、外来種問題や環境保護問題をとらえなおしてみると、問題の複雑さが浮かび上がってくる。

どのような基準や価値観のもとで、自然と作為を調和し、開発と環境保護を調和させていくのか。これらは、想像以上に困難な問いなのである。

⑥戦争・平和に関する価値対立—自立と隷属—

日本国憲法第9条は戦争の放棄を規定し、学習指導要領においても、「平和主義」は憲法の原則として記載されている。

確かに、人類が相互に殺戮をしかう戦争の悲惨さは、歴史的な無数の事例を参照するまでもなく明らかであるし、特に我が国においては、日露戦争・第二次世界大戦の総力戦経験は、戦争の経験をすべての国民に教えることとなった。

しかし一方において、国家間の対立を忌避することが絶対的な価値であると断ずることについては、困難な歴史的事実も存在する。

例えば、食糧や労働力など、希少な資源をめぐるあらゆるレベルの諸集団の抗争・紛争・戦争は古代から現代にいたるまで普遍的に生じ続けており、また上記④で述べたような宗教・文化的異質性を原因とする対立も同様である。つまり、ある集団が武力衝突を望まなかったとしても、他の集団がその集団に対してそれを望む場合、抗争・紛争・戦争を回避することは困難なのである。そのような場合、戦争の回避は、他の集団への隷属＝当該集団の自立放棄を意味することになる。例えば明治維新以降の近代日本の国家目標は、欧米列強による反植民地状態を脱することであり、すなわち他国への隷属を回避し、独立を回復・維持することにあつた。

さらには、「平和主義」が却って大規模な戦争の契機となる歴史的事例の存在も、平和と戦争の単純な二項対立図式の成立を困難にする。チェンバレン政権下のイギリスは第一次世界大戦の反省に基づき、平和主義的外交政策をとったが、ナチスドイツはこれを利用して侵略的対外進出を継続し、結局は第二次世界大戦を招来したのである。

“平和のために戦う”という一見矛盾したモチーフが、歴史上または文学や映像作品上繰り返し登場することは、この問題の困難性を示す一例である。

なお、ホブズ的な意味における社会契約、ないしは M.ヴェーバー的意味における暴力装置の独占が達成されている近代国家においては、その国家内の紛争は国家権力によって抑止・調停したうえで法的に解決する制度が整備されているが、国際社会においては、国際連盟や国際連合が同様の機能を国際的に果たすべく構想されたものの、国家における権力の一元制や紛争抑止機能などを十全に発揮するような体制は未完のままである。

4. 基本的価値対立を理解する際に利用できる教材の例

・『テキストブック私たちと法—権威、プライバシー、責任、そして正義—』(Center for Civic Education 著、江口勇治訳、現代人文社、2001 年)。: アメリカの小学生向け公民教材であり、「権威」「秩序」の重要性=自由の制限の必要性を示すわかりやすい説明を、その冒頭で展開。

・『新装版レモンをお金に変える法』(レイズ・アームストロング著、河出書房新社、2005 年): 小学生でも経済現象の基礎が分かる絵本。

・『アメリカの高校生が学ぶ経済学』(ゲーリーE. クレイトン著、大和証券商品企画部訳、WAVE出版、2005 年): 身近な話題を通じて、経済原理から経済実践にいたるテーマを平易解説。

・国家(各国): 各国の共同体意識の一側面が、どのように形成されているのかを知る素材。

・カードゲーム『モダン・アート』(ライナー・クニツィア作、1996 年、メイフェアゲームズ): 市場と価格、「美人競争」を実感するための素材。

・ボードゲーム『ディプロマシー』(allan B. Calhamer 作、1999 年、アヴァロンヒル): 国際政治における対立と協力を実感する素材。

・ボードゲーム『キープクール』(Gerhard Petschel-Held/Klaus Eisenack 作、2004 年、Spieltrieb): ドイツで広く環境教育に使用されているボードゲーム。環境問題と経済発展をめぐる利害対立を実感する素材。

・アニメ『世紀末救世主伝説 北斗の拳』第1話「神か悪魔か!? 地獄にあらわれた最強の男」(芦田豊雄監督、1984 年): ホブブス的世界=権力の不存在=万人の万人に対する闘争をわかりやすく示す素材。

・映画『キリングフィールド』(ローランド・ジョフィ監督、1984 年): 権力的介入による平等達成が全体主義となり、全体主義が集団内の虐殺へつながるという負の側面を示す素材。

・映画『動物農場』(ジョン・ハラス、ジョイ・バッチェラー制作監督、1954 年): 革命による人権宣言と革命後の人権の変質を示す素材。

・映画『ボーリング・フォー・コロンバイン』(マイケル・ムーア監督、2002 年): アメリカにおける武装の自由・権利に関連する社会問題を提示する素材。

・アニメ『キャプテン』第3話「強敵金成中」(村田英憲制作、1980 年): 部活動のレギュラー争いを通じて、集団構成員の民意と、リーダーシップに基づく判断の葛藤を示す素材。

・ドラマ『ライフ』第4話「イジメと闘う決意!! 反撃開始!? 私は強く生きたい!!」(中野利幸プロデュース、2007 年): 紛争の回避=隷属と、反撃=対立・物理的衝突の葛藤を示す素材。

・映画『マーズアタック』(ティム・バートン監督、1996 年): 意図的侵略者に対する平和主義の無力さを示す素材。

・映画『パッション』(メル・ギブソン監督、2004 年): 聖書をなぞるストーリー展開。

歴史的に繰り返されたキリスト教とイスラム教の対立を理解するための素材。

・映画『ブレイブハート』（メル・ギブソン監督、1995 年）：侵略と自立、共同体意識と自立の関係をテーマとしつつ、現在連合王国を形成しているイングランドとスコットランドが、歴史的に対立してきた事実を理解する素材。

・映画『里山』（菊池哲理ディレクター、2009 年）：自然との共生、作為による自然の維持の例を示す素材。

5. 本プロジェクトの成果に基づいた試験的講義の例（パワーポイント資料）

平成 23 年度「ブリッジ社会」第 12 回（授業者：小島伸之、於上越教育大学講 301 教室）

・講義においては以下のパワーポイント資料の他、・アニメ『世紀末救世主伝説 北斗の拳』第 1 話「神か悪魔か!? 地獄にあらわれた最強の男」、アニメ『キャプテン』第 3 話「強敵金成中」、ドラマ『ライフ』第 4 話「イジメと闘う決意!! 反撃開始!? 私は強く生きたい!!」の一部を、それぞれ使用した。

なお授業アンケートにおいて、社会に関する基礎的問題を、実感を伴って理解することができた旨の評価を得ることができた。

平成23年度
ブリッジ社会

法学・政治学 から見た社会

担当: 小島伸之

専門知識と実践教育の狭間

※ 「学者」と「運動家」

※ 私の考える学問とは

...一貫した論理と正確な実証(データ)により、ある事象のからくりを読み解く作業

※ 「あたりまえ」を問い直す営み

※ 「あたりまえ」が検証されれば、あたりまえに還る勇気

※ 何を教えるのか—どう教えるのか

※ 小学生になる—小学校の先生になる

※ 理想—現実

※ なぜ社会科は

地理
歴史
公民

で構成されているのか?

平和の反対概念は?

※ 平和—戦争

※ 平和—無秩序

自由は大切か？

- ※ 然り
 - ...では、自由は目的か？
- ※ ...しかし、過度の自由は放縱・わがまま、無秩序となる

cf. ホッブスの「自然状態」

平等は大切か？

- ※ 然り
 - ...では、平等は目的か？
- ※ ...しかし、過度の平等は向上・進歩の停滞、怠惰の奨励となる

...さらに

自由と平等の原理的相克

- ※ 人間社会は、そもそも不平等な状態にある
- ※ 不平等な状態を平等な状態に近づけるには、社会への権力的介入が不可欠
- ※ 社会への権力的介入は、不可避免的に自由の範囲の縮減となる

自由と平等をバランスするもの

- ※ 秩序
 - cf. ボダンの「主権論」
- ※ 秩序は如何に形成されるか
 - 秩序形成の営みのひとつが政治

目的・手段の峻別

政治とは何か

- ※ 多数の人々が共同で生活する社会(集団)で、それぞれの利害を調整し、秩序を形成・維持する営み。
 - 対立に決着をつけ、最終的には人々を強制して服従させる力(=権力)が必要。

- ※ 社会における利害調整には、多種多様なものが、多数存在する

...政治とは、各個別利害の調整を行うと共に、諸利害調整に優先順位をつけて、優先されるものから解決を図る

...劣位に置かれたものは「切り捨てる」という決断

利害調整の困難性

- ※ あちらを立てればこちらが立たず

...腫瘍がある...オペで摘出するか、薬を使うか、そのままにして様子を見るか...

病状の深刻さと施術の副作用の比較考量による

体全体・他の身体部位等に与える影響を無視できない

- ※ 個人として「許せない」こと ≠ 社会として不要なこと

あらゆる利害調整をすべて解決することは可能か？

- ※ communismの試み

- ※ 「規制緩和」という試み
- ※ 「政治改革」という試み
- ※ 「官から民へ」という試み
- ※ 「地方分権」という試み

法・法律とは何か

- ※ 法

法とは、社会秩序の形成・維持・発展のためにつくられた規範(行動基準)の一種で、国家権力に裏付けられた強制力を持つもの。

- ※ 法律

国民生活を規律する規範。議会(国会)の議決を経て制定された成文法を指す。

- ※ 法の支配と法治国家はどこが違うか？

※ 法律＝政治による利害調整・秩序形成の結果を、成文化・規範化(ルール化)したもの。

※ 社会規範の一種
道徳、慣習、宗教、習慣、法律...

国家とは何か

ある一定の範囲内を領土とする国民の共同体。

(nation的側面) +

※ 利害調整実行を担保するための強制力を有する権力機関(state的側面)。

※ 国家の役割

・対外的には独立を保ち、国内では秩序を維持し、国民の安全を守る。

・経済・福祉・教育などの諸領域で国民が健康で快適な生活を送ることができるように支援する。

※ 国家とは
＝特定の秩序形成を担保する単位

政治・法律の「枠」、「範囲」

グローバリズム化と国家

※ 国家は不要か？

...「地球政府」はなぜできないのか？

または、つくることがめざすべきなのか？

＝すべての国家・社会に全く共通する利害調整の基準を設定することはできるか？

日本国憲法の三つの基本原理

※ Q1. 日本国憲法の三つの基本原則は...？

・基本的人権の尊重

・国民主権

・平和主義

...ちなみに

※ Q2. 日本国憲法の三つの基本原理は、憲法の中に明確に規定されて

・いる

or

・いない

→答え: いない

- ✧ 日本国憲法の三大原則
＝「大日本帝国憲法との対比」という視点

「民」「国民」の捉え方

- ✧ 民主主義の「民」、国民主権の「国民」とは？
→秩序は如何に形成されるかを考える1つの重要なポイント
- ✧ 現在の有権者
いま・ここ重視...近代主義的
- ✧ 過去・現在・未来の国民
連続性重視...保守主義的

平和主義と戦争放棄

- ✧ 平和＝(国家間の)軍事的(暴力的)衝突のない状態
- ✧ 平和は貴重なものであるが、...どんな状況下でも絶対的価値を持つものであるのか？

「話し合い」でどうしても調整がつかない時にはどうすればいいのか？

→cf.国際社会では、国内社会のような利害調整のルール、システム、強制力が十分に整備されていない。

- ✧ 平和主義と戦争誘発の歴史的事例にも留意。...必ずしも、戦争放棄＝平和とはならない可能性

6. 本プロジェクト成果発表会成果発表会資料（パワーポイント）

・平成 24 年 2 月 29 日（於上越教育大学学校教育実践研究センター）

近現代社会の基本的価値に関する社会科教材開発

上越教育大学
人文・社会教育学系
小島伸之

研究メンバー

- ・ 松田慎也（宗教学）
- ・ 畔上直樹（歴史学）
- ・ 吉田昌幸（経済学）
- ・ 小島伸之（法学）

社会科の目標

- ・ 社会生活についての理解を固め、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

[平成20年8月小学校学習指導要領解説p.10]

- ・ 広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

[平成20年9月中学校学習指導要領解説p.17]

「暗記科目」？としての社会科

- ・ 「小学校社会科」「暗記科目に逆戻り」は誤解。考えるための新しい視点追加

文部科学省教科調査官・澤井陽介氏

- ・ 平成20年3月に告示された新学習指導要領（以下、新指導要領）「小学校社会科」では、「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」が求められている。教科目標の「公民的資質の基礎を養う」ことに関わって、小学校社会科で目指すべき授業像、子ども像がより一層明確になった、と文部科学省教科調査官の澤井陽介氏は述べる。（以下略）

[教育マルチメディア新聞]

http://www.kknews.co.jp/moruti/news/091112_1a.html,

平成24（2011）2月28日閲覧]

一方...

- ・ 「社会科＝暗記科目」という認識は、本学学生にも（そして一般的にも）一定以上に共有されている傾向

- ・ その要因として、高校入試、大学入試の在り方の問題（思考力、論理力ではなく、記憶力に関する試験（これはこれで必要性のあることではある、が...。基礎的知識がなければそもそも思考不可）。背後に、社会に関する問題で、正解を設定することの困難性）

社会とは？

多面的・多角的考察とは？

- ・ ...社会的事象はそれをとらえる観点によって大きく見え方が変化することから、資料を適切に収集、選択、処理、活用し、それらの資料に基づいて多面的・多角的に考察し公正に判断する態度を身に付けさせる...

[平成20年9月中学校学習指導要領解説p.17]

社会学から見た「社会」

- ・ ...人間の社会的行為から出発して社会関係、社会集団、その相互的な関連としての全体的な社会構造を把握...[社会学小辞典、有斐閣、1997、p. 245]

- ↓
- ・ 類型化された相互行為とその全体構造

- ↓
- ・ なぜ、行為が類型化・構造化されるか

↓
生物学的・地理的・価値的・物質的前提による拘束

地理的・価値的・物質的前提の多様性

- ↓
- ・ 地理・歴史・公民各領域の相互連関性

- ↓
- ・ 地理的条件により当該社会の基本的在り方が規定（地理的領域）

- ↓
- ・ それを前提にして、社会が歴史的に展開（歴史的領域）

- ↓
- ・ それを前提に、（現代）社会の諸制度・諸問題が成立（公民的領域）

「教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な活動」

本プロジェクトの視点

- ・ 現代社会の基本的価値及びその相克に注目

cf. 「広い視野」「多面的・多角的」

「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力」

「伝統と文化の尊重」

人文・社会科学の学術的基盤
(研究者等)

↓
近現代社会の基本的価値に関する対立構造
(小中学教員等向けに体系的に教材化)

↓
社会を多面的、多角的に理解するための個別具体的な教材
(子ども達にとって身近でわかりやすい、本質的社会理解につながる教材)

近現代社会の基本的価値と その相克の具体例

自然法—自然権—人権と実証（人定）主義

- ・ E.バーク—T.ホッブズ・J.ロック・J.J.ルソー—「人権思想」

↑
↓
J.ベンサム

社会VS個人

神（伝統）の法VS人の法

自由と平等

アダム・スミス—F.ハイエク—J.M.ケインズ—マルクス主義
—市場（自由）重視— 管理（平等）重視—

自由を重視すれば平等が害され
平等を重視すれば自由が害される

cf. 効率・合理 vs ゆとり
自由と秩序の相克

社会進化と個別文化の尊重

・ H. スпенサー・K. マルクス—E. バーク・B. マリノフスキー

・ 社会の近代化（合理化・効率化）と我々らしさの保持
cf. 幕末維新以降の日本史
中央集権と地域主権
TPP問題

・ 平和と戦争の問題
＝ 望まぬ合理性を強要されたときにどうするか？

リーダーシップと民主主義

・ プラトン・N. マキャベッリ・ルソー—H. ケルゼン—
「直接民主主義」

・ プロフェッショナル的判断か、みんなの意見か？

cf. 選挙によって何を選ぶのか？（中選挙区と小選挙区）
裁判員制度

講義実践の試行

・ ブリッジ社会（小学校を想定）

「自由の限界と秩序・政府の必要性」
（ホブズターゼ）
使用教材＝アニメ「北斗の拳」第一話

「リーダーシップと民意の相克」
（集団の目的達成と個の尊重）
使用教材＝アニメ「キャプテン」第三話

「争いの根源」（他者との利害対立）
使用教材＝ドラマ「LIFE」第四話

・ 日本国憲法（中学・高等学校を想定）
「日本国憲法の成立と価値対立」
日本政府—GHQ—連合国諸国
使用教材＝ドラマ「憲法はまだか」
ドキュメンタリー「日本国憲法を生んだ密
室の九日間」

おわりに

・ 講義実践の試行から...

初等、中等教育の重要性